武士の嗜み、武士の威厳 その二

一 仙台藩士の行列に関する基礎的研究 一

堀田幸義

はじめに

支配身分の威厳を表現したとされる近世武士の行列とはどのようなものであったのか。先行研究を紐解けば、将軍や大名らの大行列について取り上げられることが多く¹⁾、一方で、各藩士たちの行列となると途端に注目されなくなっていくことがわかる。

筆者は別稿において、仙台藩を事例に、藩当局が藩士たちの行列をどのように統制し規制していったのかについて考察を加えている²⁾。そこでは、藩財政も藩士たちの家計も極めて危うい状況に陥る18世紀半ば過ぎには、諸士の供人数が「御用捨」されることが多く、中下級藩士たちのなかには供連を以て武士の嗜みを表現することすらできない、あるいは、しない者たちが現れるようになっていたこと、伊達家という御家の武威を表す大行列の一員として集団としての武家の威信を保ちつつも、生活に困窮し武士としての矜持を失ってしまったかの如き個としての藩士たちの姿がそこにはあったこと、一方では武士を侮る「富商富農」まで見られ、士風の廢頹も進んでいくことについて述べている。

武士身分に憧れる者がいる³⁾一方で、武士への無礼を働き武士を侮る者たちがいること、換言すれば、供も連れずに凡下同然の体で歩き回り凡下に侮られるような状態にまで陥った武士たちがいたことは、近世身分制社会を考える上で看過できない問題を含んでいるように思われる。ただし、別稿では、紙幅の都合もあり、こうした問題について概説的な叙述に終始してしまい割愛した部分も多い。士と凡下の関わりについては、別稿を用意しているので、本稿では、武士たちの行列をめぐる問題に絞って、基本的な事項を押さえつつ、より具体的な像を描き出すため、少しく丁寧に仙台藩士たちの行列について考えてみたい。

1. 仙台藩の供連^{ともづれ}規定とその変化

①石高基準から役職基準へ

仙台藩では藩士たちの供連についてどのような決まり事を設けていたのであろうか。こうした供連規定については、従来きちんと整理されては来なかった。仙台藩士玉蟲十蔵の行列について

- 1) 渡辺浩「『御威光』と象徴」(『思想』740, 1986年), 藤井譲治『集英社版日本の歴史⑫ 江戸開幕』集英社, 1992年), 高埜利彦『集英社版日本の歴史⑬ 元禄・享保の時代』(集英社, 1992年), 山本博文『参勤交代』(講談社, 1998年), 忠田敏男『参勤交代道中記』(平凡社, 2003年), 丸山雍成『参勤交代』(吉川弘文館, 2006年), 根岸茂夫『大名行列を解剖する』(吉川弘文館, 2009年)など。
- 2) 拙稿「武士の嗜み、武士の威厳」(安達宏昭・河西晃祐編『講座東北の歴史第1巻』清文堂出版, 近刊)。
- 3) 民衆たちの身上がり願望については深谷克己『江戸時代の身分願望』(吉川弘文館, 2006年)を参照。なお、仙台藩でも金上侍の存在が多数確認できる。

取り上げた論考が最近発表されが、行列の構成を藩の軍役令と比較するなど、後に紹介するような供人数等に関する藩の規定については全く検討していない⁴⁾。しかるに、各藩士たちが引き連れるべき供連については何度も法令が出されているのであって、それを基に考察すべきである。では、藩の供連規定とはどのような内容であったのか。

そもそも藩内の武士たちがその身分格式に応じて武具・馬具を整え相応の家臣を召し抱えるべきであることについては、2代藩主忠宗期に出された家中法度に明記されている。寛永13年(1636)9月、忠宗への代替わりに際して出された「諸法度」に「一諸侍、分限に随ひ、馬其外武士の道具相嗜むべき事」とあり、同15年3月に出された「書出」に「一随身上武具鞍具嗜可申候、付内之者可相抱事」とあるのがそれである。ただし、どちらも「分限に随ひ」や「随身上」とあるのみで、「分限」・「身上」の中身についての具体的な記述はない。これらの家中法度は、伊達家中の遵守すべき基本的な事柄について記したものであり、相応の家臣を抱え置くべきことについては記載してあっても、藩士たちの供連について詳述してはいない。後の5代吉村の宝永元年(1704)に出された「定」は、幕末まで維持される家中法度であるが、そこでもやはり、「一、応分郎郎従令扶助之并弓・鉄炮・鎗・甲冑・馬皆具可嗜之、兵具之外不入道具ヲ好、私之奢イタスヘカラサル事」とあるのみである。なお、この「定」には、馬上役について「一、軍役之節ハ百石以上馬上役タルヘシ、常々御国元ハ百五十石以上馬上役タルヘキ事」と記され、戦時には100石以上が、平時の国元では150石以上が馬上役を務めるものとされている⁵⁾。同藩の享保12年(1727)の軍役令においても騎馬武者として軍役負担すべきは知行高100石以上の者たちである。

また、先の寛永13年令では、「一乗物免許の外、誰々に寄らず、乗るべからず、たとひ国にお

表1 「乗輿御定」(延宝5年〈1677〉正月)

①無条件で乗輿を許可される者 一門・一家・准一家・家老并一門嗣子3000石以上之輩、小性組番頭
②年齢を目付に断った上で乗輿を許可される者 50歳以上之輩
③駕籠赦免願(但し、本復後には乗らない事を誓約)を目付に提出した上で駕籠乗を許可される者 騎馬或歩行難計病人(但し、急病人為制外事) 宝暦8年駕籠乗御定法禁ニ出ル

『続法禁』(宮城県図書館所蔵〈KD322.1-ソ1〉) 1-1より作成。

4) J・F・モリス「奉公人の役制と管理」(同『近世武士の「公」と「私」』(清文堂、2009年)第3章第2節)。ただし、氏は玉蟲家の具体的な事例から、「十蔵が機会に合わせて行列を組んでいたこと」を指摘され、行列を組む際の基準として『軍役』に、『役』および『身分表象』とでも呼ぶべき基準の三つがあるとされている(284頁)。後述するように、場面により組む行列構成を変えねばならないことは藩の供連規定にも明記されており、「役」すなわち「役職に対応した従者数」を召し連れることが求められたのも、その通りである。

5) 以上、『宮城県史復刻版2』(ぎょうせい、1987年)109頁、『義山公治家記録』寛永15年3月13日条(平重道編『伊達治家記録四』(宝文堂、1974年)422頁)、『獅山公治家記録』宝永元年6月7日条(宮城県図書館所蔵〈K209-シ〉)より。

いて免許の輩も、江戸において指図なく乗るべからざる事」と「乗物」に関する一文も見られるが、誰が許可されるのかについては示されておらず、具体的な基準を示した法令は4代綱村の延宝5年（1677）正月に制定されている（表1参照）。

すなわち、「一門・一家・准一家・家老并一門嗣子3000石以上之輩、小性組番頭」は無条件に、「50歳以上之輩」については年齢を目付に断った上で「乗輿」が許可され、「騎馬或歩行難計病人」については、病気が治れば乗らないことを「神文」にて誓った「駕籠赦免願」を提出し目付に断った上で「駕籠」が許可され、「急病人為制外事」とされたのである。

彼の時代は藩財政の極度の悪化を受け儉約令が発せられた時代であり⁶⁾、藩士たちに対して家中手伝金を課している。元禄期には幕府から命ぜられた日光普請役のための費用を蔵元からの借金でまかかっており、蔵元たちからの借金総額は元禄の初めの時点で43万7千両余に膨らんでいた。こうした事態を受け、元禄12年（1699）12月には「辰巳兩年御手伝金被 仰付候義并御家中身持之義」が仰せ出され、元禄13・14年の両年にわたって「御家中一貫文ニ金一步充」の割合で「御手伝」を課し、その代わりに「一門衆始御家士身持」を「御免」する旨が命ぜられている。加えて、「江戸・仙台え使者・飛脚指上候義」に始まる詳細な儉約令が出されており、「来辰巳兩年」に関しては「御一門御一家御一族衆御番」を免除してでも藩士たちから手伝金を増額徴収する方針が示され、徹底した節儉を求めたのである。

そうしたなか、元禄14年2月19日に「当年江戸御供ノ輩儉約ニ就テ、人数ノ制」が出されている⁷⁾。これは、翌3月の参勤交代の御供として江戸へと向かう者たちについて、各人が召し連れるべき供連を定めたものである。当時の参勤道中や江戸における藩士たちの供連規定がどのような内容であったのか、そもそも明確な規定が存在したのかどうかについては現段階で答える用意は無いが、元禄14年の参勤交代にあたって儉約令の一環として供連に関する削減令が出されたことは確かである。14の区分で示された削減令は「番頭格以下之者」たちへ仰せ渡されており、知行高を基準に、同じ石高であっても「御騎馬之御供・御使者等」を務める者かどうかで分けていたことがわかる。

続く5代吉村期には、彼の襲封から数ヶ月後の元禄16年（1703）12月、乗物に関する規定をも含む「来年正月ヨリ、仙台ノ諸士、侍・若党ヲ率ヒ及輿・馬・鎗等ノ人数定」が出されている（表2参照）。乗物については、従来の内容とさほど変わってはいないが、延宝5年令とは異なり「申次以上ノ役」や「医師」も乗輿を許可され、この翌年に出された宝永元年の「定」には「一、於国元乗輿之事免許之輩之外、堅不可乗之、儒医諸出家者制外之事」と記されている。馬については、武頭は必ず馬に乗り、有役・無役ともに150石以上は随意馬上を許可されている。鎗は200石以上は持つべきであり、150石以上は希望すれば持つことができた。供の人数（「侍・若党」）については、表中①～⑦にあるように知行高を基に7段階に区分され、召し連れるべき人数が定められている。

これは翌年正月から適用される規定として通達されており、宝永元年（1704）正月以降は元禄

6) 以下、佐々木慶市「中期の藩政」（『宮城県史復刻版2』第8章）、『青山公治家記録全書』元禄13年正月5日条（平重道編『伊達治家記録二十一』〈宝文堂、1981年〉372～373頁）より。

7) 『青山公治家記録全書』元禄14年2月19日条（平重道編『伊達治家記録二十二』〈宝文堂、1981年〉125～127頁）。

表2 「来年正月ヨリ、仙台ノ諸士、侍・若党ヲ率ヒ及輿・馬・鎗等ノ人数定」(元禄16年〈1703〉12月)

馬について	①300石以上・以下共ニ武頭 武頭ハ馬ニ可乗 ②150石以上ノ役人 馬上、意ノ如クナルヘシ ③役人ノ外ハ500石以上(500石以下150石以上ノ者も勝手次第) 馬上、意ノ如クナルヘシ、馬上ノ者人不足ナラハ片口或ハ挟箱無モ亦可ナリ
乗物について	①一門・一家・一族ノ輩、申次以上ノ役、3000石以上 意ノ如クナルヘシ(医師モ意ノ如クナルヘシ) ②老人 願ノ上許之
鎗について	①200石以上 持シムヘシ(無人ノ時ハ持シメストモ可ナリ) ②150石以上 意ノ如クナルヘシ
供人数(「侍・若党」)について	①100石ヨリ150石ニ至マテ 1人(或ハ無モ可ナリ) ②150石以上300石下 1人(或ハ2人) ③300石以上500石下 2人(或ハ1人) ④500石以上1000石下 3人(或ハ1人・2人) ⑤1000石以上3000石下 4人(或ハ2人・3人) ⑥3000石以上5000石下 5人(或ハ4人・3人) ⑦5000石以上10000石下 6人(或ハ5人・4人)

『獅山公治家記録』元禄16年12月6日条(宮城県図書館所蔵〈K209-シ〉),「源貞氏耳袋」刊行会編『源貞氏耳袋十三巻』(2008年)138～139頁より作成。

16年令に従って行列を組むことが求められたのである。鎗と供人数については石高が基準であり、馬についても役人かどうかで分けられてはいるが、武頭以外の大半の武士たちは石高によって馬に乗るべきかどうか、あるいは、乗れるのかどうか左右されている。つまり、前述した綱村期の供連削減令も吉村期のこの供連規定も石高基準の分類方法であったわけだが、それは享保12年(1727)正月に定められた藩の軍役令と同じである。ではここで、藩の軍役令について見てみよう(表3参照)。

享保12年に出された仙台藩の軍役令は、知行高30石未満の者から23000石以上の者まで35段階に分かれた詳細なものであり、そのうち従者数の合計や連れるべき小姓・若党の人数、鎗持ちの

人数についてまとめたのが表3である。元禄16年令もこの軍役令同様に石高を基準に供（「侍・若党」）の人数を定めてはいるが、やはり平時・戦時の供人数には違いが見られる。

もちろん、軍役令の従者数には「侍・若党」以外の人夫が含まれているので、ここでは表2の供人数（「侍・若党」）と表3の小姓・若党の人数を比較してみよう。例えば、知行高550石の者は、平時には1～3人、戦時には5人を引き連れる必要があり、その差は2～4人である。それに比べて、知行高5500石の者は、平時には4～6人でよいが、戦時には19人も率いる必要があり、その差は13～15人で、石高の大きい者ほど平時と戦時とで召し連れるべき人数に差があったことがわかる。

さて、国元における供連を示した元禄16年令布達の翌年、「江戸詰人数御定」が定められてお

表3 仙台藩の軍役令（享保12年〈1727〉正月）

①10000石以上（従者数は知行高や先例に応じて） 小姓・若党や持槍も知行高や先例に応じて	⑮900石以上（従者計28人） 若党8人 持槍2人
②9000石以上（従者計302人） 小姓・若党25人 持槍5人	⑯800石以上（従者計26人） 若党8人 持槍2人
③8000石以上（従者計278人） 小姓・若党23人 持槍5人	⑰700石以上（従者計20人） 若党7人 持槍2人
④7000石以上（従者計242人） 小姓・若党22人 持槍5人	⑱600石以上（従者計17人） 若党6人 持槍2人
⑤6000石以上（従者計214人） 小姓・若党20人 持槍5人	⑲500石以上（従者計13人） 若党5人 持槍1人
⑥5000石以上（従者計191人） 小姓・若党19人 持槍5人	⑳400石以上（従者計11人） 若党4人 持槍1人
⑦4500石以上（従者計149人） 小姓・若党19人 持槍4人	㉑300石以上（従者計9人） 若党3人 持槍1人
⑧4000石以上（従者計137人） 小姓・若党18人 持槍4人	㉒250石以上（従者計7人） 若党2人 持槍1人
⑨3500石以上（従者計125人） 小姓・若党17人 持槍3人	㉓200石以上（従者計5人） 若党1人 持槍1人
⑩3000石以上（従者計109人） 小姓・若党16人 持槍3人	㉔150石以上（従者計4人） 若党1人 持槍1人
⑪2500石以上（従者計74人） 小姓・若党13人 持槍2人	㉕100石以上（従者計3人） 若党1人 持槍1人
⑫2000石以上（従者計61人） 小姓・若党12人 持槍2人	㉖50石以上（従者計1人） 若党0人 持槍1人
⑬1500石以上（従者計50人） 小姓・若党9人 持槍2人	㉗30石以上（従者計0人） 若党0人 持槍0人
⑭1000石以上（従者計43人） 小姓・若党8人 持槍2人	㉘30石未満石以上（従者計0人） 若党0人 持槍0人

『御軍役御定』（『仙台市史資料編2』〈1996年〉39～70頁）、渡辺信夫「仙台藩と幕府」（『仙台市史通史編3』〈2001年〉第3章第3節）145頁所載の表「96 仙台藩の軍役」より作成。

り⁸⁾、その2年後の宝永3年(1706)12月には早くも改訂版が出されている。どちらも、藩主の参勤交代に付き従って江戸へと登る参勤道中や江戸にて召し連れるべき供人数を定めたもので、宝永3年の「江戸詰供人数御定」をまとめたのが表4である。宝永元年令では、奉行衆の召し連れる「内之者」が42人で、同じく「道中増人」が33人の計75人、若年寄については「内之者」が25人に「道中増人」が16人の計41人とあるなど、全体的に宝永3年令の方が人数を少なく抑えてある。

仙台藩では吉村治世の初めに領内の大洪水があり田畑の損亡が著しく、加えて、代替わりの諸

表4 参勤道中および江戸での供人数について(宝永3年<1706>12月)

①御奉行衆 (内之者計30人と馬2匹+道中増人計20~22人=合計50~52人と馬2匹)
内之者 家老1人 用人1人 小性4人 取次2人 徒之者4人 料理人1人 鎗持1人 挟箱2人 傘持1人 口付4人 草履取1人 合羽箱1人 沓箱持1人 人足3人 物書1人 □者2人 乗馬2疋
道中増人 対鎗持3人 弓持1人 具足箱持2人 最料4人 挟箱手替1人 合羽箱持2人 漣尺6人(4人ニ而も勝手次第) 又者3人
②若老衆 (内之者計19人と馬1匹+道中増人計12~14人=合計31~33人と馬1匹)
内之者 家老1人 小性3人 物書1人 用人1人 取次1人 徒之者2人 料理人1人 鎗持1人 傘持1人 草履取1人 挟箱1人 口付2人 人足3人 乗馬1疋
道中増人 対鎗持3人 具足箱持2人 合羽箱持1人 最料2人 漣尺6人(4人ニ而も勝手次第)
③江戸番頭・御小性頭等 (内之者計15人と馬1匹+道中増人計7~9人=合計22~24人と馬1匹)
④出入司 (内之者計16人と馬1匹+道中増人計7~9人=合計23~25人と馬1匹)
内之者 用人1人 大所持1人 小性2人 取次1人(出入司ハ取次1人増) 徒之者3人 鎗持1人 傘持1人 草履取1人 挟箱持1人 沓箱持1人 人足1人 口付1人 乗馬1疋
道中増人 槍持1人 具足箱持2人 漣尺6人(4人ニ而も勝手次第)
⑤無役番頭格 (内之者計11人と馬1匹+道中増人計5~7人=合計16~18人と馬1匹)
内之者 用人1人 徒之者3人 鎗持1人 挟箱持1人 草履取1人 口付2人 合羽箱1人 沓箱持1人 乗馬1疋
道中増人 具足箱持1人 漣尺6人(4人ニ而も勝手次第)
⑥御近習目付・御近習・江戸番組頭・御小姓組頭・御武頭等 (内之者計10人と馬1匹)
⑦御目付 (内之者計13人と馬1匹)
内之者 用人1人 徒之者2人 鎗持1人 挟箱持1人 口付2人 草履取1人 沓箱持1人 合羽持1人 乗馬1疋 御目付ハ外ニ小走2人・定附1人
⑧御勘定奉行 (内之者計7人)
内之者 留主居1人 徒之者2人 鎗持1人 挟箱持1人 草履取1人 人足1人
⑨衣体300石以上 (内之者計5人)
内之者 留主居1人 徒之者1人 挟箱持1人 草履取1人 人足1人
⑩衣体100石以上 (内之者計4人)
内之者 留主居1人 徒之者1人 草履取1人 人足1人

8) 齋藤鋭雄「江戸屋敷と大名の交際」(『仙台市史通史編5』<2004年>特論二)525頁参照。

⑪衣体50石以上（内之者計3人） 内之者 留主居1人 草履取1人 人足1人
⑫衣体50石以下（内之者計2人）
⑬御小性組并子共300石以上（内之者計6～7人） 内之者 留主居1人 徒之者1人 鎗持1人 挟箱持1人 草履取1人 人足1人 御供相勤候者ハ徒之者1人相増、内之者7人之高也
⑭御小性組并子共150石以上（内之者計5人） 内之者 留主居1人 徒之者1人 鎗持1人 草履取1人 人足1人
⑮御小性組并子共100石以上（内之者計4人） 内之者 留主居1人 徒之者1人 草履取1人 鎗持1人
⑯御小性組并子共100石以下并部屋住無足并御年男迄（内之者計2人）
⑰兎小性并子共1000石以上（内之者計4人）
⑱兎小性并子共1000石以下（内之者計3人）
⑲兎小性并子共500石以下（内之者計2人）
⑳京都御留主居番（内之者計9人）
㉑龍ヶ崎奉行（内之者計8人）
㉒深川御屋敷役人（内之者計4人）
㉓潮来御穀方本メ（内之者計5人）
㉔銚子平汚御穀役人（内之者計4人）
㉕組侍之外300石以上（内之者計5人）
㉖組侍之外100石以上（内之者計3人）
㉗100石以下部屋住無足迄（内之者計1人） 御作事本メ・江州常州御代官・深川横目・御買物役人ハ内之者2人、外何役ニ候共内之者1人
㉘御茶道頭（内之者計3人） 300石以下内之者2人
㉙御茶道組頭（内之者計1人）
㉚御同朋頭（内之者計2人）
㉛御同朋組頭（内之者計1人）
㉜坊主頭（内之者計1人）
㉝御徒組頭（内之者計1人）
㉞右之外組侍之分（内之者計0人〈無僕〉） 組外之御用ニ付前々内之者1人召連候分御茶道・御同朋も前々之通召連可申事 ・此度之定、馬為牽候義ハ前々之通600石以上之者ハ自分馬ニ而可相勤候、600石已下之者ハ御貸馬被成下候、乍然勝手次第を以自分馬為牽申度者ハ御貸馬為指繰之候間於御国元前廉ニ願可申候、馬之食御貸馬同前ニ可被下置候、附、自分馬売替等仕候ハ、代り馬求候内ハ廿日迄ハ御貸馬被成下候間廿日を限代馬相求可申事 ・右何も相定人数之内ニ召連候義ハ面々進退位之御奉公可相勤候ハ、可為勝手次第、定之外1人も召連候義ハ諸渡物旅御扶持方共ニ被下間敷候 但、追々明和4年右御定ノ人数相減候様品々被仰渡候事

『続法禁』1-2より作成。①の□は解説出来なかった部分。

経費も嵩んだことから、元禄16年9月に儉約令が出されている。吉村は藩財政を建て直した人物として有名であるが、宝永元年12月には藩札廃止のための引き替え正金を準備するため藩士たちからの「半知指上」を断行しており、代わりに藩士たちが備え置くべき人馬等についての削減を許可している。結局は、宝永2年が凶作だったことや京都での資金調達が上手くいかなかったことで藩札整理事業はなかなか進まず、宝永3年9月段階では江戸へ「御参観」することもままならないような苦境に立たされている⁹⁾。したがって、元禄16年12月に出された国元での供連規定も、宝永3年12月に出された参勤道中および江戸における供連規定も、財政再建築の一環と見るべきであろう。

ところで、宝永元年令も同3年令も、各役職ごとに召し連れるべき「内之者」の総数とその内訳が示されており、役職を基準に石高をも加味した内容であったことがわかる。先の元禄16年令が石高基準の分類を基本としていたのに対し、こちらは役職基準の規定と言え、各人が何の役職に就いているのかによって組むべき行列の構成が決められている。

仙台藩では2代藩主忠宗期以降職制の整備が進んでおり、4代綱村は家格制を再編・整備し役職の支配系列を決定するなど、家臣相互の身分的序列化をいっそう進展させるような政策を実施している。そして、5代吉村の享保13年(1728)には家格によるヒエラルヒーと役職によるヒエ

表5 仙台藩の「役列」(享保13年(1728)3月)

1 御一門	18 御申次	30 御近習医師	48 代々御盃頂戴
2 御一家	19 御一家之惣領・御一	31 御徒小性頭	49 御番医師
3 准御一家	門衆次男三男・御一	32 脇番頭	—是迄御召出以上—
4 御一族	家並之惣領・御一族	33 御鷹匠頭	50 御物置メ役
5 御奉行	之惣領	34 御城番頭	51 江戸番与頭
6 御宿老	20 法眼	35 御奥年寄	52 御小性与頭
7 御一家・准御一家	21 法橋	36 御町奉行	53 並御武頭、番頭格已
・御一族之隠居	22 御鎗奉行	37 御祭祀奉行	上之惣領
8 御奉行相勤御免之者	—是迄番頭格已上—	38 御近習目付	54 御勘定奉行
・御宿老勤候隠居	23 番頭格以上之隠居	39 御不断頭	55 御作事奉行
9 若年寄	24 着座之医師	40 御給主頭	56 京都御留主居
10 御簇奉行	25 良覚院	41 御名懸頭	57 龍ヶ崎奉行
11 大番頭	—是迄着座—	42 御簇元足輕頭	58 御二ノ丸留主居
12 評定奉行(評定役)	26 御家老之惣領	43 御公義使	59 津奉行
13 大番頭格以上之隠居	(御宿老惣領無役)	44 御郡奉行	60 御山林奉行
14 江戸番頭	27 若年寄之惣領	45 御近習	61 相去御足輕頭
15 出入司	28 御簇奉行之惣領	46 御目附使番	62 評定所御役人
16 御小性組番頭	29 御一家・御一族之次	47 代々着座	63 御証文預主立
17 御小性頭	男三男		—右詰所以上—

『源貞氏耳袋』(東北大学附属図書館所蔵〈本館甲D・1・35〉)9-3、『萬格式御定』(宮城県図書館所蔵〈KM322.1-ヨ2〉)、『四冊留』(『宮城県史復刻版31』ぎょうせい、1987年)、『司属部分録』(『復刻版仙台市史8』萬葉堂書店、1975年)、『萬文通諸状之事附御役列』(東北大学附属図書館所蔵〈己A・3・196・50〉)より作成。

9) 佐々木前掲論文参照。

ラルヒーとを統合し一列に並べた「役列」（表5参照）が制定されており¹⁰⁾、こうした一連の流れの中で、国元における藩士たち個々人の行列についても、それぞれが従事する役職に基づいた規定が示されるようになっていくのである（表8以下の各表参照）。そして、役列における「詰所以上」や「番頭格以上」といった身分格式の違いが行列の構成の違いとして表現されるのであった。

②藩主の行列と藩士の行列

この役列規定が出される前年の享保12年3月に藩主外出時の供人数について従来の規定が改められている¹¹⁾。そこでは、「拾里以下御近所十日以上共御人数」と「拾里以上 御出馬御人数」の二つに分けた上で、御供すべき者たちについてそれぞれ役職名と人数が示してあり、列挙されている人数を足し合わせてみると、藩主が城から10里以内の場所へ出かける場合には「若年寄」以下250人以上の者が、10里以上の場所へ遠出する場合には「御奉行」以下290人近くの家臣たちが付き従ったことがわかる。しかもこの数字には奉行や若年寄などが連れてくる陪臣の数を含めていないので、藩主の行列はさらに多くの者たちで構成されていたと言える。御供の者たちそれぞれが率いるべき「内之者」の人数については、同年5月に「在々御出馬之節御供之輩人数積」が申し渡されている（表6参照）。参勤道中や江戸における供人数ほどではないが、各役職ともに日常的な「供廻」よりも多くの従者を必要としていたものと思われる。

参勤交代の行列も在方への出馬行列もともに仙台藩主の行列であり、とりわけ藩主の行列に強いこだわりを持つ伊達家にあつては、それを支える各藩士たちの行列についても多くの供連を用意させていたのである。同藩の行列について探っていくと、藩主行列の一部を構成する際の各藩士たちの供連の多さと、藩士たち個々人が自らのために組む行列の供の少なさが対照的に見えてくる。参勤交代や初入部ごとに組まれる仙台藩主の行列は時に批判されるほどの善美を尽くした豪華絢爛な大行列であり、城下に集まった領民をして絶句させるほどの感動を覚えさせている¹²⁾。それを支える藩士たちは、役職ごとに決められた行列構成を維持するため人足を借り馬を借りるなどして対応しているが、彼らの日常的な供廻りは近世中後期以降の経済的な逼迫状況の中で年々質素なものとなっていく。

将軍のお膝元である江戸には他藩の者たちも多く集まっており、仙台藩では外聞を気にしてか国元での行列よりも多くの供を連れるよう藩士たちに指示しているが、かと言って藩主の行列と比べると彼らの行列が誠に小さく思ってしまうほどに、藩主行列は桁違いに人数が多い。6代藩主宗村期の江戸における藩主行列の構成をまとめたのが表7である。

「略御行列にて御出之節御供御人数」でさえ計100人もの従者が連なって移動していくのであって、藩主が江戸藩邸の周りを歩いて回るだけで20人以上の者たちが必要になってくる。この20人という数は藩の若年寄が江戸にて備えるべき供人数よりも多い数である（表4参照）。まして江戸城への登城時や老中の許へ赴く際などには193人から成る行列を組んでおり、行列の中心にいる者の威光を行列の長大きさを以て表現するという意味では、どんなに高い役職者の行列であつて

10) 詳しくは拙著『近世武家の「個」と社会』（刀水書房、2007年）を参照。

11) 『御用留』110・111（宮城県図書館所蔵〈KM318.1-コ6〉）。

12) 詳しくは前掲拙稿を参照。

表6 「在々御出馬之節御供之輩人数積」(享保12年(1727)5月)

①御奉行(計25人) 用人2人 小性4人 徒之者3人 賄方役人1人 手鍬持1人 先鍬持2人 挟箱持2人 草履取1人 口取2人 沓箱持1人 合羽箱持3人 押足軽1人 最料1人 食焼1人
②若年寄(計13人) 用人1人 小性2人 徒之者2人 鍬持1人 挟箱持1人 口取2人 草履取1人 簀箱持2人 沓箱持1人
③御小性頭(計8人) 用人1人 小性1人 徒之者2人 鍬持1人 挟箱持1人 草履取1人 簀箱持1人
④御近習目付・御近習・御目付・御小性組与頭・御武頭(計7人) 留守居1人 徒之者2人 鍬持1人 挟箱持1人 草履取1人 簀箱持1人
⑤衣体300石以上(計6人) 留守居1人 徒之者1人 長刀持1人 薬箱持1人 挟箱持1人 草履取1人
⑥衣体100石以上(計4人) 留守居1人 薬箱持1人 挟箱持1人 草履取1人
⑦衣体100石以下(計2人)
⑧御小性組300石以上(計5人) 留守居1人 徒之者1人 鍬持1人 挟箱持1人 草履取1人
⑨御小性組100石以上(計4人) 留守居1人 徒之者1人 挟箱持1人 草履取1人
⑩御小性組100石以下(計2人)
⑪定御供ハ右御小性組ニ准可申事
⑫前髪有之御小性并子共ハ兼而被御付置候身持之通召連可申事

『御用留』(宮城県図書館所蔵〈KM318.1-コ6〉)114より作成。

表7 江戸での藩主行列(6代藩主宗村期[寛保3年(1743)7月~宝暦6年(1756)5月]の規定)

①御登城并御老中方え之御出, 其外御同席様方等他所御見廻之節御供御人数(計193人) 諸士24人 凡下御扶持人41人 御駕籠之者并御挟箱持諸持夫御人足迄67人 又者61人
②中御烏毛御先え被相立候節之御供御人数(計137人) 諸士18人 凡下御扶持人32人 御駕籠之者并御挟箱持諸持夫御人足迄43人 又者44人
③略御行列にて御出之節御供御人数(計100人) 諸士16人 凡下御扶持人25人 御駕籠之者并御挟箱持諸持夫御人足迄35人 又者24人
④御屋鋪御近所々御直々遠方え御出之節御供御人数(計51人程) 諸士11人 凡下御扶持人14人 御駕籠之者并御挟箱持諸持夫御人足迄26人 外ニ思召次第御側之輩被召連候事, 御供之輩内之者勝手次第召連候事
⑤御屋鋪御近所え御歩行に而被為出候節之御供御人数(計20人程) 諸士8人 凡下御扶持人9人 御人足3人 外ニ思召次第御側之者被召連候事

『宗村公御代所々御出之御行列五冊袖ヶ崎ヨリ麻布邸マテ道法并絵図式通』(仙台市博物館所蔵〈伊達家寄贈文化財1435-1〉)より作成。

も藩主行列には及びもつかないものであった。

さて、話しを藩士たちの国元における行列に戻したい。元禄16年（1703）に石高を基準とする藩士たちの供連規定が出されたことは前述したが、同じく吉村期の享保17年（1732）11月に同藩の家格門閥層に関する規定が出されている。役職従事者についても同時期に出されたのではないかと思われ、それらをまとめたのが表8である。

無役の家格門閥層の場合も役職従事者の場合も、「布衣御供之節」、「御城下御名代常々共」、「在

表8-1 「無役之御一家・御一族衆・無役着座共供人数」(享保17年〈1732〉11月)

<p>【3000石以上10000石下】</p> <p>①布衣御供之節（計13～14人） 小性2人 徒之者3人 鎧持1人 対挟箱持2人 草履取1人 口附2人 沓箆持1人 合羽持1人（2人も勝手次第）</p> <p>②御城下御名代常々共（計11～12人） 小性2人 徒者2人 鎧持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人 合羽箱持天気次第（人数未記載）</p> <p>③在郷え御名代之節（計20～24人） 小性3人 徒者3人（2人も勝手次第） 鎧持1人 対挟箱持2人 草履取1人 長柄傘持1人 口附2人 沓箆持1人 漉尺6人（4人も勝手次第） 合羽箱持2人（或3人） 立切1人</p> <p>④年始・歳暮（計14～15人／但、自分之儀ニ候間相減候義勝手次第之事） 小生2人 徒者3人 鎧持1人 対挟箱持2人 草履取1人 漉尺4人 合羽箱持1人（或2人）</p>
<p>【1000石以上3000石下】</p> <p>①布衣御供之節（計12～13人） 小生2人 徒者2人 鎧持1人 対挟箱持2人 草履取1人 口付2人 沓箆持1人 合羽箱持1人（或2人）</p> <p>②御城下御名代常々共（計9～11人） 小生2人（常々ハ1人も勝手） 徒者1人 鎧持1人 挟箱1人 草履取1人 漉尺4人 合羽箆持天気次第（人数未記載）</p> <p>③在郷え御名代之節（計15～18人） 小生2人 徒者2人 鎧持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺6人（或4人） 口付2人 沓箆持1人 合羽箱1人（或2人）</p> <p>④年始・歳暮（計12～13人／但、自分之儀ニ候間相減申義ハ勝手次第） 小生2人 徒者2人 鎧持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人 合羽持1人（或2人）</p>
<p>【300石以上1000石下】</p> <p>①布衣御供之節（計11～12人） 小生2人 徒者2人 鎧持1人 挟箱持1人 草履取1人 口付2人 沓箆持1人 合羽持1人（或2人）</p> <p>②御城下御名代常々共（計9～10人） 小生1人 徒者1人 鎧持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人 合羽箱持1人（天気次第）</p> <p>③在郷え御名代（計11～14人） 小生2人 徒者1人 鎧持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人（或6人） 合羽持1人（或2人）</p> <p>④年始・歳暮（計11～12人／但、自分之儀候間相減候儀ハ勝手次第） 小生2人 徒者1人 鎧持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人 合羽箆持1人（或2人）</p>

・石何も御城下在郷共二馬ニ而相動度者は勝手次第可仕候、尤乗輿指支候輩ハ漉尺之部相除可相心得事
『高野家記録』宝暦11年2月1日条（宮城県図書館所蔵（K211-タ））より作成。「人数未記載」部分については、1人として計算し、以下の各表も同様。なお、『覚書』（吉田正志編『藩法史料叢書3 仙台藩上』創文社、2002年）493頁も参照した。

郷え御名代之節」,「年始・歳暮」の4つのパターンに分け,それぞれの行列構成について定めている。何のためどこへ向かうのかによって,それに相応しい行列を組むことが求められたのである。供人数を比較すれば明らかなように,仙台城下を藩主らの名代として移動する際や日常的な供廻りが最も簡素なもので,在郷へ赴く際の行列が最も規模の大きな行列であったことがわかる。

前述したように,藩主自身の行列について言えば,居城から10里以上の地へ出馬する場合により大規模な行列が生まれ,藩士たちの行列についても,藩主の名代として「在郷」へ向かう場合に最も多くの供を率いたのである。すなわち,藩主権力の象徴たる城や城下から遠く離れた地域へ向かう時ほど,藩主の御威光を表象するような長い行列を組んで移動したのであり,実際問題として多くの人数が必要だったこともあろうが,一方では,見られること,見せることを常に意識した行列の組み方をしていたのである。

表8-2 「御役附之輩供人数」(年未詳/享保17年<1732>11月カ)

<p>【若年寄の大番頭格以上】</p> <p>①布衣御供之節(計12~14人) 小生2人 徒者2人(但,正月3日御野始之節徒者1人相増可召連事) 鎗持1人 対挟箱持2人 口附2人 沓籠1人 合羽箱1人(或2人) 草履取1人</p> <p>②御城下御名代御参詣御先立常々共(計9~11人) 小生2人(常々は1人にて勝手次第) 徒者1人 鎗持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人 合羽持天氣次第(人数未記載)</p> <p>③在郷え御名代之節(計15~19人) 小生2人 徒者2人 鎗持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人(或6人) 口附2人 沓籠持1人(或2人) 合羽籠1人(或2人)</p> <p>④年始・歳暮(計12~13人/但,自分之義二候間相減候義は勝手次第) 小生2人 徒者2人 鎗持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人 合羽籠1人(或2人)</p>
<p>【江戸番頭格番頭格以上】</p> <p>①布衣御供之節(計12~13人) 小生2人 徒者2人 鎗持1人 対挟箱持2人(但,正月3日御野始之節は挟箱2可持事) 草履取1人 口附2人 沓籠1人 合羽持1人(或2人)</p> <p>②御城下御名代常々共(計9~10人) 小生1人 徒者1人 鎗持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人 合羽籠天氣次第(人数未記載)</p> <p>③在郷え御名代之節(計12~15人) 小生2人 徒者2人 鎗持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人(或6人) 合羽籠持1人(或2人)</p> <p>④年始・歳暮(計11~12人/但,自分之儀二候間相減候義勝手次第) 小生2人 徒者1人 鎗持1人 挟箱持1人 草履取1人 漉尺4人 合羽持1人(或2人)</p>
<p>・右何も御城下在々共二馬二而相勤度者は勝手次第可仕事</p>
<p>・東照宮御祭礼之節御見物所え計之御供之者も他所之者参候由二而唯今迄ハ人数多ニ召連候処,向後常々供廻ニ而可相越事</p>
<p>・岩城伊予守様・松前志摩守殿杯御領内御旅宿え御使者又は自分御見舞共ニ他所之分へ唯今迄之通外人之供廻ニ而絹布は不為着可召連候,田村下総守様えハ常々之供廻ニ可仕事</p>

『高野家記録』宝暦11年2月1日条より作成。

③ 儉約令と供人数の削減

以後、各藩士たちの行列は表8にまとめた供連規定に基づき組まれることになるが、藩財政の窮乏と家中の困窮化によってその改変が余儀なくされていく。元禄期や宝永期に出された藩の供連規定・供連削減令も藩財政の再建策と関わりのあるものであったが、表8-1にまとめた法令が出されたのも、享保13年（1728）11月の儉約令と関係している。

当時の仙台藩では「御家中大進之輩始諸士御奉公仕候者は不及申、無役之者迄」が30～40年来の困窮に喘いでおり、彼らは江戸や他国での奉公を命じられた折には必ず拝借金を藩に願い出て来たことから、その額は「過分之拝借高」となり、「其身は勿論子孫之代迄進退役之御奉公勤義不罷成者」の数が倍に増え、おまけに藩の側も貸与するだけの資金が無くなってしまいうような状態であった。そこで厳しい儉約令を出すことになり、その際、奉行たちが相談し自分たちの「供廻」を削減したものの、「御一家・御一族衆人数前々之通ニ而、不相減衆も有之二付」という理由で出されたのが、享保17年令なのである¹³⁾。

ただし、宝暦期以降の状況を考えれば、この段階はまだましであったと言えるかもしれない。宝暦6年（1756）正月21日、「詰所以上之衆惣登 城」の上で儉約令が命ぜられ、藩内の状況について次のような説明がなされている¹⁴⁾。

先年 御入興已来袖ヶ崎浅布御屋敷御普請、御隠居・御家督御代替、初而之 御入部御物入多、延享二年より御不幸被為続、寛延二年御領分不作三十二万石余御損亡、東叡山御普請御手伝被蒙仰、莫大之御物入御国用不足段々御儉約被 仰付処、去々年迄打続米穀下直ニ而御払穀御余計は無之、却而御損失相出、右ニ付而は御家中も困窮ニ及候得共 上之御繰合不被為成御蔵元え御借金被 仰付渴々御間合候故御家中御恵可被成下様も無之、何も被 仰出を守御儉約之義合心相勤候ニ付、去々年迄ハ御蔵元え被 仰付候御借金年々御返済も被遊候処、去年御領内大不作田畑水損又ハ不熟皆無之地影敷五十四万石余之御損亡有之、数十ヶ年来無之義、御家中え被下候知行之外御蔵入之御物成僅四万石程ニ有之、御蔵米御扶持方御役料等に被下候御用穀半分余不足、金納も応右相減、御買石被相登候義も被相止候故御穀払金を以御繰合も不被為成、御家中え被下置候御穀之義ハ御借金を以御買穀被成置可被渡下候得共、右之御買石金并 御公辺御勤向等難被相略御入方有之間、御蔵元之右金高此已後引続可相納候哉も巨計、元禄年中御逼迫之節ハ御家中御手伝金被仰付候得共、当時何も甚困窮知行不熟之輩別而相憚候時節御手伝等被 仰付候思召ニ曾而無之、元来御出高を以御遣方御間合候様ニ 御先代之被 仰出、近年別而被 仰出も有之処、去年之出高右之通ニ而、前々被 仰付よりも甚しく別段ニ御儉約不被相行候而ハ不罷成御時節ニ候条、御上下御艱難をとともに被遊、元禄年中之被 仰出ニ被為寄当年之辰年迄五ヶ年之間身持各別に省略被 仰出候、元禄年中は御手伝も被 仰付候に付御一門中始勤方寤候様ニ被成下候、今度ハ御手伝も不被 仰付候間、右之通被 仰出儀も無之候得共、連々困窮之御家中及困迫末々御奉公相勤可申者も無之様ニ可罷成と 上ニも憚思召候に付被 仰出候事ニ候間、面々右之旨とくと勘弁仕此

13) 以上、『高野家記録〈倫兼自筆記〉』享保13年12月13日条、『覚書』71（『藩法史料叢書3 仙台藩上』493～495頁）より。

14) 『高野家記録』宝暦6年正月21日条。

節儉約を専と仕少之費も無之様ニ心懸候義、何も此節之御奉公と奉存身上取直候様ニ可仕候、委細は奉行共可申渡由 御意之事

5代藩主吉村の享保20年(1735)に世子宗村の正室として將軍家から利根姫を迎えて以来、寛保3年(1743)の吉村から宗村への代替わりと延享元年(1744)の初入国に当たっての物入り、翌2年の吉村室冬姫・宗村室利根姫兩人の相次ぐ死、寛延2年(1749)の領内大凶作、同4年(宝暦元、1751)の幕府からの東叡山寛永寺の普請役賦課といった、莫大な経費を要する出来事が連続して起きただけではなく、宝暦4年(1754)まで「米穀下直」状況が続いたせいで藩士たちも困窮の度合いを深め、それに追い打ちをかけるかのように、宝暦5年、「五十四万石余之御損亡」をもたらす領内大凶荒が発生してしまったのだという。

「御蔵米御扶持方御役料等に被下候御用穀半分余不足」し「御蔵元」からの借金に頼り切っている藩にとっては、藩士たちの窮状を救うべく「御恵」を下賜することも叶わず、逆に「何も甚困窮知行不熟之輩」を前に「元禄年中御逼迫之節」のような「御家中御手伝金」を課すわけにもいかず、もはや「前々被 仰付よりも甚しく別段ニ御儉約不被相行候而ハ不罷成」ような事態となっていた。そこで「当子年々辰年迄五ヶ年之間身持各別に省略」することを義務づけ、供人数についても大幅な削減を命じたのである(表9参照)。

乗物については「御一門衆始無役3000石以上之輩」のみが許可され、たとえ一家や一族であっても役職に就いている者は乗輿不許可とされ、鎧については「無役之御一家・御一族之輩ハ500石以下」と「番頭格以下之輩」が不許可とされている。つまり、鎧を持たせて歩いている一行は無役500石以上の家格門閥層か番頭格以上の者の行列ということになり、乗物に乗っている人間は役職には就いていない門閥層の者ということなる。「有役之輩召連候供人数」についても表中①～④のような人数に改められおり、従来の規定で最も略された行列構成と比べてみても半分程度まで削減されたことがわかる(表8-2参照)。

ところが、「御一家・御一族之輩始兼而乗輿 御免之者も御儉約中三千石以下乗輿被相扣、大番頭格已上者馬ニ而相勤、番頭格歩ニ而相勤」めるという状況については不満が出ており、「御名代等相勤候節歩ニ而相勤候故及迷惑」ぶとの意見や「元来乗輿可仕者共一向乗輿被相留候而は何も迷惑仕」といった声上がり、翌年には「乗輿之儀は前々の通勝手次第可仕事」と元に戻され、50歳以上の者の「年齢駕籠乗」についても一旦は廃止されたにも拘わらず「右之通ニ而は極老之者共出行指支迷惑仕」という理由で、どうしても歩行が困難な者については「前々の通御用舎被成下事」とされている(表10参照)。

なお、50歳以上の者(老人)について、元禄16年(1703)段階までは「駕籠乗」ではなく「乗輿」が許可されており(表1・2参照)、時期は不明であるが、その後、「乗輿」は不許可とし「駕籠乗」を許可する方針へと転換したことがわかる。こうした「乗物駕籠乗之事」については、7代藩主重村の宝暦8年(1758)6月5日に出された「覚」に見ることができる(表11参照)。

表9 俚約令に見る「身持等之義」(宝暦6年〈1756〉正月)

馬について	<p>①1000石以下(歩行) 御一家・御一族之輩共ニ御城下ニ而馬立不申歩行ニ而可相勤候</p> <p>②1000石以上3000石下(馬〈歩行でも可〉) 馬ニ而可相勤候、尤歩行ニ而勤候共可為勝手次第事</p> <p>③若年寄并大番頭格之諸役人(馬〈歩行でも可〉) 1000石以下ニ而も馬ニ而可相勤候、歩行ニ而相勤候共可為勝手次第</p> <p>④大番頭格以下之輩并大番組(歩行〈武頭指立候時は馬許可〉) 1000石以上たりとも歩行ニ而可相勤事 但、御武頭廻番等之節も歩行ニ而可相勤之、指立候時ハ御借馬可被成下候事</p>
乗物について	<p>①御一門衆始無役3000石以上之輩(乗興許可) 乗興勝手次第</p> <p>②御一家・御一族并3000石以上(有役者は乗興不可) 有役之輩は乗興難成候事</p>
鑓について	<p>①無役之御一家・御一族之輩ハ500石以下(鑓不可) 鑓為指間敷候</p> <p>②番頭格以下之輩(鑓不可) 有役無役共ニ進退不寄多少鑓為指間敷候</p>
有役之輩召連候供人数について	<p>①若年寄・大番頭格以上(計4~6人) 侍2人(侍1人に相減候共不苦候) 鑓持1人 草履取1人 人口付1人 挟箱は入用之節計可為持事(人数未記載)</p> <p>②番頭格以上(計3~5人) 侍2人(侍1人に相減候共不苦候) 鑓持1人 草履取1人 挟箱は入用之節計可為持事(人数未記載)</p> <p>③番頭以下詰所以上(計1~4人/1僕召連候共勝手次第) 侍2人(侍1人に相減候共不苦候) 草履取1人 挟箱は入用之節計可為持事(人数未記載)</p> <p>④大番組等(計0~3人/或ハ1僕、或ハ無僕ニ而も勝手次第) 1000石以上之者共ニ上下3人 挟箱は入用之節計可為持事(人数未記載)</p>

『高野家記録』宝暦6年正月21日条より作成。なお、「④大番組等」の「上下3人」については、『高野家記録』享保6年4月9日条などより、主従合わせて3人と解釈した。

表10「乗興乗馬禁被相弛触」(宝暦7年〈1757〉年5月)

乗興について	<p>・御一家・御一族之輩始兼而乗興 御免之者も御俚約中3000石以下乗興被相扣、大番頭格已上者馬ニ而相勤、番頭格歩ニ而相勤候筈ニ候処、御名代等相勤候節歩ニ而相勤候故及迷惑候段被為聞候、人数等相減候義は何分ニも勝手次第之事ニ候、元來乗興可仕者共一向乗興被相留候而は何も迷惑仕候由相聞得、此段尤之儀ニ思召候、此御時節に候間可罷成程ハ人数等も相減俚約を元ニ仕、乗興之儀は前々之通勝手次第可仕事 但、有役無役共ニ馬上仕度者ハ勝手次第ニ可仕事</p>
駕籠について	<p>・50歳已上之者年齢駕籠乗候儀も被留置候処、右之通ニ而は極老之者共出行指支迷惑仕候由被為聞候、可罷成程ハ年齢駕籠乗可仕者も歩行ニ而相勤、自分之出行等も歩行可仕候得共、其内ニハ成かね候者も可有之間、前々之通御用舎被成下事 ・御医師駕籠乗候儀ハ為病家之間是亦前々之通御用舎被成下事</p>

『高野家記録』宝暦7年5月20日条より作成。

表11 乗物・駕籠について（宝暦8年〈1758〉6月制定）

①無条件で乗物を許可される者 御一家・御一族之輩，御申次以上之役人，3000石以上
②無条件で駕籠乗を許可される者 番頭格以上 医師・出家は制外之事
③年齢を目付に断った上で駕籠乗を許可される者 50歳以上之輩

『法禁』（『復刻版仙台叢書二』宝文堂，1971年）361頁より作成。

2. 供連規定をめぐる紆余曲折と行列の具体像

①「勤方」や「身持」の「御免」・「御用捨」

以上のように，宝暦5年（1755）未曾有の「領内大不作」が発生してしまった仙台藩では，翌年の正月21日に供連規定の変更をも含む儉約令を出しており，当日は「御城中御詰所」において奉行衆から大番頭へ4通の文書が渡されている。第1の文書では，前掲史料にあるような最悪の状態にまで落ち込んだ藩の財政状況についての説明がなされ，「元禄年中之被 仰出ニ被為寄当子年々辰年迄五ヶ年之間御儉約各別ニ」行うことを命じている。諸役所においても「格例ニ不泥只今迄之遣方四ヶ一相減是非御間合候様」に支出を抑えた運営を命じ，「元禄辰巳之御法式を目当ニ仕」ることを求めており，4代綱村の元禄辰巳の年（元禄13・14年）の「御法式」を模範としていたことがわかる。第2・第3の文書の内容は表9にまとめた通りで，第4の文書は次のようなものである。

覚

- 一、御一門衆始大身小身共無役詰所已上之輩勤方一円被成下 御免候，勝手次第在所ニ罷在，年始・御参勤・御下向之節も 御目見ニ罷登問敷候，右之内兼而 御機嫌伺等申上候輩は，御在国中何時ニ而も勝手次第一度罷登 御目見可仕候，右之外兼而御機嫌伺等不申上輩ハ，年始・御参勤・御下向之節ニ而も勝手次第一度罷登 御目見可仕候
右何も罷登候節ハ至而輕仕可罷登候事
- 一、御役目相勤定仙之者，年始・御参勤・御下向之節計前々之通罷出，其外ハ例月之御礼も無用ニ候，御用ニ而致登 城候時ハ 御通之 御目見仕候義ハ可為勝手次第候，但，人ニより品有之輩ハ追而可申渡事
- 一、大番組当番，只今迄之通可相勤候，定仙之者は，年始・御参勤・御下向三ヶ度共勝手次第登 城仕，在郷之者ハ，右三ヶ度之内勝手次第一度罷登 御目見可仕，不如意之者は不罷登候共不苦事
- 一、御役目等又は御奉公之勤有之者は，其品ニより勤方寃候様二段々御吟味可被仰付事
- 一、諸願之義，家督被 仰付候義共，在郷ニ罷在候輩ハ名代ニ而可被 仰付事
願相出候義も在郷ニ罷在候輩ハ名代ニ而願可相出事
- 一、隠居并家督之御礼ハ願可申上候，其外諸御礼不及申上候，品ニより不申上不叶節ハ可致指図事

- 一、子共初而之 御目見之義ハ、千石已上之嫡子ハ 御目見可仕候。千石已下ハ当分可為無用候、但、御一家・御一族并代々着座・番頭格以上之嫡子は千石以下ニ而も勝手次第 御目見願可申上事
家督并初而之御礼申上候輩、江戸・仙台え只今迄以使者申上候義ハ以飛脚申上、飛脚ニ而申上候義ハ以便書可申上候、併、使者不指上不叶義ハ其節ニ至可致差図候、御在国中從江戸も可為同然事
- 一、右諸御礼 屋形様え申上候分 御曹司様え可申上事
右献上物之義ハ、屋形様・御曹司様え相定馬代之半分充を以献上御礼可申上事
- 一、献上物之義、初鳥・初鮭等ハ格別、其外ハ献上物一式無用ニ候、品ニより不指上不叶節ハ可致指図事
- 一、面々身持之義、前々々段々被 仰出候よりも各別質素を可相用候、衣服之制ハ延享年中被 仰出候通、大身・重職たりとも布・木綿着用之義は可為勝手次第
- 一、小身之輩ハ、猶更此節布・木綿を着し、少も結構成体仕間敷候、勿論絹・紬より以上之衣服商売仕間敷由被相停候条、縦御一門衆又は万石以上たりといふとも、絹・紬已上之衣類女小袖迄江戸・京都えも申越間敷候、但、鬘斗目并女無工小袖指当入候分ハ各別ニ候、随分輕品を相用少分之義をも相厭候様ニ可仕事
- 一、新規之作事、不叶義ハ各別、先は無用ニ可仕候、御役目被 仰付、物書部屋等無之不自由ニ而も、長屋之内敷又はいか様之所ニ而もしつらひ可指置候、御用ニ而寄合候共寄合所等普請不仕、何様之所ニ而も御用可相弁事
- 一、嫁娶之祝義等、弥以輕仕、料理致無用、吸物酒三献、肴一種之外相出間敷候、併、遠方々婚儀相調料理不相出難成時分は、成程輕不可過一汁一菜事
- 一、諸事祝義等取遣候義、先ハ無用たるへく候、若重視義之節不取遣不叶義ハ段々被 仰出候趣を以猶更輕祝義一篇迄ニ可仕候事

以上 正月廿一日

ここで注目したいのは、通常であれば藩士たちが必ず行わなければならないような勤めを免除し、藩主への御目見や藩主および藩主家成員に対する御礼の言上あるいは献上物の進上といった儀礼的行為を大幅に省略している点である。かつて綱村治世下の元禄辰巳の年にも、異常な状態に陥った藩財政を建て直すため、各藩士たちへ御手伝金を課す代わりに「一門衆始御家士身持」が免除されたことがあった。今回の儉約令でも各役所へ「元禄辰巳之御法式」を見倣うよう指示し、「面々身持等之義」についても「辰巳兩年」に採られた方法に倣うような施策が施されている。第1条に「御一門衆始大身小身共無役詰所已上之輩勤方一円被成下 御免候」とあるのも、元禄13年(1700)・同14年の2年間に「御一門御一家御一族衆御番被成御免」たことに倣ったものであろう。これは「家並御番」を免除したということであり、「家並御番」が何なのかを考えれば、単に些末な儀礼的行為を免除したに過ぎないというような評価はできない。

仙台藩伊達家にあつては藩政初期に伊達騒動と呼ばれる御家騒動を引き起こしており、騒動の真っ直中に亀千代様と呼ばれた4代藩主綱村は成人後に親政を行い、失墜した藩主権力の回復・再

強化を図る政策を次々に行っていくことになる¹⁵⁾。実際の政治の場においては、しばしば一門衆らによって掣肘を加えられたのが彼の時代であったものの、それまで不規則であった門閥家臣たちについての上府・定仙および在所下向の原則を定め、君臣関係の規律化を推し進めたのもまた事実である。すなわち、初入部から約2年後の延宝5年(1677)5月、「御一門・一家・准一家・一族衆」に対し「御在国中ノ番割」を定め、上府する(仙台へと登る)者たちについてのグループ分けとその順番を決め、一定期間は仙台に留め置き、期間が過ぎれば各々の知行地へと帰すことを制度化しており¹⁶⁾、後々は「代々着坐并御盃頂戴之輩」(着座と太刀上)にも適用されている。

そして、『高野家記録』明和4年8月21日条に「無役永代着座之輩家並当番上府之節或ハ何そ役等被 仰付上府罷在候節は、朔望出仕又は諸御怡事并御機嫌伺等直々罷出申上候事ニ候」とあることからわかるように、定仙期間中(仙台滞在中)に藩主らに対して種々の儀礼的行為を行うのが「家並当番」・「家並御番」なのであって、君臣関係の規律化を促すための重要な行為なのである。したがって、綱村の辰巳両年の場合も今回の儉約令の場合もそうした「御番」を免除した意味は大きい。

また、元禄12年(1699)12月に「辰巳両年」にわたる一門衆らの「御番」を免じた際には、「千石以下之衆ハ御迎ニ被罷登候儀、被致無用、夏中御機嫌伺ニ可被致出府候事」や「御一門中息方御一家御一族衆惣領大身之衆モ、御迎ニ被罷登候儀被致無用」旨も一緒に命ぜられており、「千石以下之衆」や「御一門中息方御一家御一族衆惣領」らについては、元禄13年(1700)5月に江戸から仙台へと下向する綱村を出迎える必要がないものとされている。今回の儉約令では、一門衆をはじめ無役詰所以上の者たちに対して「勤方一円被成下 御免候、勝手次第在所ニ罷在、年始・御参勤・御下向之節も 御目見ニ罷登間敷候」と命じており、元禄期に行われた免除よりもさらに踏み込んだものであったことがわかる。

主君と仰ぐ者へ御目見に参上するのは武士として当然の行為とも言えようが、まして他家に比べて強大な門閥家臣を抱える仙台藩伊達家にとっては、年始の御礼は主従関係再生産の最も重要な場である。この頃までには藩主を中心とした官僚機構による藩政運営がなされるようになってはいたが、年始にさえ上府しなくともよいというのは、やり過ぎのような気もする。それだけ劣悪な経済状態だったとも言えようが、財政再建を目指して出されたこの儉約令は、封建的主従制の根幹にかかわる内容を持つものであり、「勝手次第在所ニ罷在」ことを認め、年始規式への参加も義務づけず、藩主への御目見等も最小限に止めるのであるから、裏を返せば、在郷へ籠もりきって主君への御目見もせず、諸願が許された時の御礼や献上物の進上もせず、相応の供廻りも準備しない者が出て来ても不思議ではない。それを敢えて藩主導で行かせたのである。

ところが、一転して、宝暦8年(1758)2月になり儉約令以前の状態に戻されている¹⁷⁾。新藩主重村の初入部にあたっての措置である。宝暦6年の儉約令発布当時の藩主である6代宗村はその年の5月に死去してしまい、同年7月に息子重村が跡を継いでいた。その彼が「御代替初而

15) 詳しくは前掲拙著を参照。

16) 『青山公治家記録全書』延宝5年5月19日条(平道重編『伊達治家記録七』(宝文堂, 1976年) 426～427頁)。

17) 『高野家記録』宝暦8年2月15日条。

御入部被遊」ということで、旧例に戻されたのである。宝暦8年2月15日、家格着座高野家の当主倫兼は、「兼而在所仕罷在候代々着坐并御盃頂戴之輩」への仰せ渡しとして、「御在国中廿日充之御番、其外身持等之義迄、御儉約中御用舎被 仰付候処、当夏御暇被 仰出 御下向被遊候ハハ、御代替初而 御入部被遊候間、御着城之砌人馬召連候義・御礼・御番、其外諸事御儉約以前之通被仰出旨」を命ぜられており、同様の内容が詰所以上の役人へも仰せ渡され、「人馬召連候義并諸御礼其外諸事」について「御儉約已前之通」とされている。

藩主として初入国する7代重村を迎える家臣たちに「御下向之節も 御目見ニ罷登間敷」と指示するわけにはいかないのも当然と言えば当然である。藩の財政を再建するということと、儀礼的行為を通じた君臣関係の規律化あるいは主従間の紐帯強化・主従関係の再生産という両方のバランスをどのようにとっていくのか、そこが問題であり、「諸士身持之義」に関する藩の政策が二転三転する部分でもある。凶作による大飢饉の発生、膨大な費用のかかる参勤交代や関東諸川の修理普請役・蝦夷地警衛のための派兵・日光普請役といった幕府から命ぜられる様々な軍役奉仕、全国的な商品貨幣経済の発達とそれに巻き込まれる藩士たちの存在、そして、米価安の物価状況などによって、藩財政の窮乏化が進み伊達家中の生活が追い込まれていくのは宝暦期以後も同じであり¹⁸⁾、その度ごとに儉約令が出され藩士たちの「身持」が「御用捨」されており、本稿で分析対象としている藩士たち個々人の供連についても何度も法令が出されることになる(表12～21参照)。

かと思えば、先に見たように旧例に戻す指示を出すこともあったし、それまで定仙していた藩士たちに対し彼らの生活を成り立たせるため在郷移住を認めた藩が、後に大進家臣に「成丈定仙も仕候様可心懸」旨を申し渡したり、「大番組始諸士定仙之義も段々被 仰出置候へ共、相続基本立兼候故敷、今に際立定仙之者も無」いことを嘆いたりもしている¹⁹⁾。

供連について言えば、「御家中一統御手伝被仰付候に付、供人数等省略可召連由」を仰せ出したにも拘わらず、「詰所以上は勿論番頭格以上并常々供人数之義、是迄も各別に省略召連候義にて、此上人数相減候ては御役階級も無之候間」という理由で、「常式は是迄之通召連、御名代或は上使等都て指立候節は是迄よりは供人数相減らすように微調整することもあったのである(表15参照)。表12～21までを一覧していただければわかるように、仙台藩では幕末に至るまで何度となく藩士たちの供連に関する法令を出しており、「番頭格下之輩は鑓をも不為持見分ケも無之候間」という理由で「詰所以上之輩は徒以上えは袴為着常々可召連」旨が明和3年(1766)に命ぜられているものの、安永4年(1775)には「番頭格下詰所已上之輩并大番組300石以上共ニ鑓為持候義前々之鑓可為持」ように改正している。つまり、詰所以上の者へ鑓を許可しない場合には彼らの連れて歩く徒の者に袴を着用させ、鑓と袴によって、どのような格式を持つ者の行列なのかを見分けていたことがわかる。なお、明和3年令では、私用で組む行列の場合、大番組格以上であっても鑓を持たせず、供人数も減らすことが許されており、天保7年(1836)にも同様に申し渡されている。

18) 以上、佐々木慶市「近世史」(『宮城県史復刻版2』)参照。

19) 以上、『続法禁』5-1。

表12 「若年寄始御家中御城勤向供人数御用舎之事」(宝暦11年〈1761〉正月)

馬・乗物について	①若年寄始大番頭格以上之輩(馬または歩行) 病身等無余義品有之者は格別, 多は乗輿相扣馬又は歩行二而相勤 ②番頭格已上之輩(歩行) 病身等無余義品有之者は格別, 乗輿馬上共相扣歩行二而可相勤候
供人数・鑓について	①若年寄始番頭以上 供廻人数相減候義, 勝手次第相減召連候義不苦事 附, 病身等二而乗輿之輩雖為河外漉尺3人二而相勤候事勝手次第不苦事 ②詰所以上之輩 鑓之外供人数勝手次第相減不苦事 ③大番組等 右ニ随ひ猶更相減可召連事
有役者の供人数について	・近年の進退不相応ニ人数大勢召連候者も相聞得, 勿論進退高下ニ無構家並を以一様ニ召連候者も有之様ニ相聞得候, 有役之者も御役之供廻えハ不相構無役之節之供人数召連候者も相聞得候, 御役ニ附居候而は有役之供廻不召連不叶事ニ候, 御定之通屹度相守可召連 ・御役ニ付而も家之方ニ而御取扱在之節并年始7日迄ハ御用之外自分之礼廻等家ニ附候儀ハ無役家並之供廻召連候義不苦

『高野家記録』宝暦11年2月1日条より作成。

表13 俵約令に見る「身持等之事」(明和3年〈1766〉11月)

有役之輩常々供人数について	①若年寄・大番頭格以上(計4~5人) 侍2人 鑓持1人 草履取1人 挟箱入用之節計勝手次第(人数未記載) ②番頭格以上(計3~4人) 侍1人 鑓持1人 草履取1人 挟箱入用之節計勝手次第(人数未記載) ③詰所以上(計1~3人/只今迄2人召連候輩或1僕召連候輩共に1僕召連候義ハ可為勝手次第候) 侍1人 草履取1人 挟箱入用之節計勝手次第(人数未記載) ④大番組等(計0~3人/或1僕, 或無僕にても勝手次第) 1000石以上之者共ニ上下3人 挟箱は入用之節計可為持事(人数未記載)
	・年始・歳暮は不及申縦指立不申節或自分出行等之節共ニ只今迄之人数召連候義は勝手次第可仕候, 併常々之義は随分相略候様可仕候
乗物について	・兼而乗輿之輩ハ只今迄之人数召連候節は乗輿可為勝手次第候, 且常々人数相減召連候節ニ候共痛所等有之輩は駕籠乗不苦候
袴・鑓について	・詰所以上之輩は徒以上えは袴為着常々可召連候, 番頭格下之輩は鑓をも不為持見分ケも無之候間右之通被仰付候, 但, 御武頭下之輩并御番医師ハ勝手次第為着可申事 ・自分之出行等之節は縦ひ大番頭格以上たり共鑓をも不為持供人数相略候義共ニ可為勝手次第事

『高野家記録』明和3年11月13日条より作成。なお、「④大番組等」の「上下3人」については、『高野家記録』享保6年4月9日条などより, 主従合わせて3人と解釈した。

表14 「御役金御免二付、身持并勤方」(安永4年〈1775〉12月／安永5年正月より適用)

供人数について	・御一門衆始大進歴々の輩常々供人数当分相減候義勝手次第相略相応ニ召連候様ニ明和3年仰付候通当分可相心得事
鍮・挟箱について	・番頭格下詰所已上之輩大番組300石以上共ニ鍮為持候義前々の鍮可為持候、挟箱は可為勝手次第事
馬・袴について	・馬は大番組共800石以上も勝手次第可仕立候、且詰所已上之輩徒之者以上え袴為着義可相扣候

『高野家記録〈退隠記〉』安永4年閏12月29日条より作成。

表15 「御家中一統御手伝被仰付候に付、供人数等省略」(文化11年〈1814〉6月)

供人数等について	<p>・詰所以上は勿論、番頭格以上并常々供人数之義、是迄も各別に省略召連候義にて、此上人数相減候ては、御役階級も無之候間、常式は是迄之通召連、御名代或は上使等都て指立候節は、是迄よりは供人数相減、既に常之程にも致減少可召連候、尤是迄乗輿にて相勤候分も、此末歩行にて相勤不苦候、挟箱は常式にても入用之節は為持可申候、他所之者等え応対之節は是迄之通可相心得候</p> <p>・御小姓組、定御供之内、100石以下之輩は、常には勝手次第は不召連共不苦候</p>
----------	--

『秘蔵録』(『復刻版仙台叢書十』宝文堂、1972年)277～278頁より作成。

表16 儉約令に見る「有役常々供人数」(文政9年〈1826〉)

①大番組以上(計5人) 小性1人 歩之者1人 鍮持1人 草履取1人 挟箱持1人 (但、馬・駕籠ニ而相勤候儀ハ勝手次第可仕候)
②番頭格以上(計4人) 小性1人 歩之者1人 鍮持1人 草履取1人(但、馬・駕籠ニ而相勤候儀ハ勝手次第可仕候)
③300石以上詰所以上(計3人) 歩之者1人 鍮持1人 草履取1人
④300石下詰所以上(計1～2人／但、200石下之輩1人召連候共不苦候) 歩之者1人 草履取1人
⑤御小性組・江戸番馬上(計2～3人／但、2人召連候共勝手次第可仕候) 歩之者1人 鍮持1人 草履取1人
⑥300石以上(計2人) 歩之者1人 草履取1人(但、鍮為持之儀勝手次第可仕候)
⑦300石下(人数不明／但、200石以上之輩2人召連候共勝手次第可仕候) 是迄之通
<ul style="list-style-type: none"> ・人等差支候節ハ格別、成丈ヶ公私共不相略様可心懸候 ・差立候節ハ右ニ准シ人数相応ニ可召連候 ・江戸他国詰之節ハ当分是迄之通可相心得候 ・詰所以上之輩徒之者ハ是迄之通襦為着可申候 ・無役之輩も右ニ准身分禄高相応ニ召連候様可心懸候

『続法禁』4-7より作成。

表17 馬や鑓の御用捨と供人数等について（文政11年〈1828〉5月）

馬・鑓について	・常々於御国元ハ150石以上馬上役たるへき由今度之御条目へも被相載候へ共御先代被仰出候通当分ハ先以只今迄之通800石以上馬を立、300石以上鑓為持候様、引続御用捨被成下候訳ニ候、乍然800石以下150石以上にて馬を立鑓為持度輩可為勝手次第事、但、800石以下ニても番頭格以上之面々ハ文化4年被仰出置候通馬相立可申候
供人数等について	・供人数等ハ当分文政9年被仰出候通可召連事

『続法禁』4-11より作成。

表18 儉約令に見る「詰所以上始供人数」（天保4年〈1833〉）

①若年寄・大番頭格已上（計4人） 侍2人 鑓持1人 草履取1人
②番頭格以上（計3人） 侍1人 鑓持1人 草履取1人
③詰所以上（計1～2人／但、只今迄兩人召連候輩或ハ1僕召連候輩共ニ1僕召連候義ハ可為勝手次第事） 侍1人 草履取1人
④大番組等（計0～2人／或ハ1僕或ハ無僕ニても勝手次第事） 右ハ1000石以上之者共ニ上下3人
・御小性組定御供之内100石下之輩常々は勝手次第僕不召連候共不苦候

『続法禁』5-13より作成。なお、「④大番組等」の「上下3人」については、『高野家記録』享保6年4月9日条などより、主従合わせて3人と解釈した。

表19 儉約令に見る鑓・袴・供人数（天保7年〈1836〉10月）

儉約方針について	・天保4年大不作ニ付詰所以上始供人数被相減、御一門衆始大進歴々之輩常々供人数此上相略、兼而乗輿之輩勝手次第歩行不苦、挾箱は常々共ニても入用之節ハ為持可申、内証向共ニ召仕之男女成丈減少可申趣共ニ被相触置候通ニ候処、当年も非常之大不作ニ付弥天保4年被相触候通
鑓・袴について	・自分之出行之節ハ縦令大番頭格以上たりとも鑓をも不為持供人数相略候義共ニ可為勝手次第事 ・詰所以上之輩ハ歩以上えハ袴為着常々可召連候、番頭格以下之輩ハ鑓をも不為持見分ケも無之候間右之通被仰付候、但、御武頭下之輩并御番医師ハ勝手次第為着可申事
供人数について	・御小性組等100石以上之輩内之者は病氣故障等之節ハ無僕ニても不苦趣ハ此頃伺之上相済候通可相心得候

『続法禁』5-13より作成。

表20 「先規之通供人数等之御触」（嘉永元年〈1848〉11月）

供人数等について	・当時供人数等御格外ニ被相略置、何時迄も右体ニ而者不相濟事ニ候条、引続御手伝指上候覚悟ニて、衣食住之義より別而質素儉約仕、其節ニ至り如元相復候様可心懸候
----------	--

『源貞氏耳袋六卷』10～11頁より作成。

表21 俟約令に見る供人数等について（安政3年〈1856〉11月・12月）

11月令	・番頭以上以下之輩共ニ御衣冠御東帯等御騎馬御供相動候節、此末大番頭已上徒2人召連候輩ハ、1人ニ而又ハ一切不召連小性而已、右以下輩ハ右江准し挟箱相減、口付2人ハ1人と申様、何レも勝手次第第二相減候様被仰渡
12月令	・御一門衆始大進曆々之輩常々供人数等此上致省略候儀不苦、尤兼而乘輿之輩勝手次第歩行不苦、挟箱ハ常々ニ而も入用之節ハ為持可申旨、天保4年被相触候所、右之輩在々神社仏閣江参詣等之節、行粧取飾供人数も大勢召連候族も有之事ニ相見得、如何之事ニ候間、自今何分質素致供人数も相減、被相触御趣意相立候様可仕候

『源貞氏耳袋八巻』78頁より作成。

②供連にこだわる者、こだわらない者

表12にもあるように、「御役ニ附居候而は有役之供廻不召連不叶事」とされており、勝手に「無役家並之供廻」を召し連れることは許されておらず、家格門閥層であっても藩の役人である以上は各役職ごとに定められた供廻りでなければならなかったことがわかる。もともと低い家格の者であれば自己の役職序列が上がるにつれて供廻りも多くなってこようが、より高い格式を持つ層では役職に就いたことにより供廻りを少なく抑える必要が出てくることもあり、「無役家並之供廻」の方が人数が多いこともあったのである。

行列を組む際に家格によるのか役職によるのかという問題については、家格着座高野家の『高野家記録』に興味深い記事が載っているので紹介してみよう。『高野家記録』明和4年4月7日条には次のようにある。

○左之通長沼氏家来々通達有之通達門四

写

御手前義、当正月二日登 城之節詰之御門内え小性兩人召連候処、御門御定ニ着坐之部立無之、壹人外難相入由御門番御武頭申聞候に付、前々々兩人充召連來候間、只今迄之通被成下度品々被申聞令承知候、着坐之輩年始・歳暮供人数之義宝曆十一年相触置候通ニ候間、年始には小性兩人相入候様可有之候、右之趣御門番御武頭へも申渡候、以上

三月十二日 長沼五郎助殿

要人 下野

将監

達写

拙者義、過ル二日年始御規式え登 城之節詰之御門内え小性兩人召連候ニ付、其節御門当番新妻源之丞申聞候は、登 城之節詰之御門内え侍二人相入候処、詰所以上ハ壹人外不罷成候間、下宿之節ハ壹人相留候段申聞候間、私共年始其外指立之節は家席之方にて大番頭格以上之方ニ而登城致候間、前々々侍二人相入候間、不相分事も候ハ、相伺候様申答候へハ、御門御定ニハ御一門衆、御一家・御一族衆、番頭以上、詰所以上と分立有之、着座之事無之候間、御役目之方を以見詰候外無之候、外ニ紛候義も無之候間相伺候ニ不及候、若夫共ニ兩人相入候義と存候ハ、拙者共方々相伺御武頭方えも御下知出候様可仕由紙面ニ而申聞候間、拙者共指立候節は大番頭以上之方ニ相附、前々兩人つ々

相入、且御門ニ而も無異儀相通来候義ニ而、当年改而指支候義も難心得候、若着坐之分立無之分シ
かね候ハ、相伺候様申遣候得共、前書之通兩人相入候義ハ指支候由再応及応対候、扱又如前文拙者
共年始其外指立候節ハ前々御役用之方ニハ不相構、家席之方ニ而登 城等仕、供人数も大番頭以上
之人数召連、且御門内えも前々兩人充相入来候義ニ候間、此以後共ニ只今迄之通被成下度奉存候、
御門御定ニ着坐と申義無之候得共、番頭以上侍二人相入申御定ニ御坐候而前々相入来候間、御吟味
被成下度、右之段相達申候、以上 正月 長沼五郎助

明和4年(1767)正月、家格着座長沼五郎助が年始規式に出席するため登城した際、「詰之御門内」へ小姓2人を連れて行ったところ、当日門番を務めていた武頭新妻源之丞が、詰所以上の役人の場合は門内へ侍2人は入れられない決まりであり、「御門御定」でも「御一門衆、御一家・御一族衆、番頭以上、詰所以上」に分類され「着坐之部立」は設けられていないと主張し、双方譲らず、悶着を起している。当時、五郎助は脇番頭であったので²⁰⁾、役職に依拠すれば役列規定における詰所以上の格式を持つ役人だということになる(表5参照)。故に新妻は詰所以上の役人についての供連規定に違反する旨を告げたのであろうが、五郎助によれば、家格着座の家柄は「御役用之方ニハ不相構」に「年始其外指立之節は家席之方にて大番頭格以上之方ニ而登城」する決まりなのであって、これまでも「供人数も大番頭以上之人数召連、且御門内えも前々兩人充相入来」ており、「御門ニ而も無異儀相通来」たのだという。結局は、奉行衆から「着坐之輩年始・歳暮供人数之義宝暦十一年相触置候通ニ候間、年始には小性兩人相入候様可有之」との命が下ることで落着し、同じく家格着座である高野家にも一件に関する知らせが届けられたのである。

着座という家格を保有する門閥層が「年始其外指立之節」にどう扱われ、それによって供連がどう変化したのかがわかる事例である。すなわち、日常的な取り扱いとは異なり、「年始其外指立之節」にはその人間の家格が優先され、「家席之方」に基づく供連が認められたわけである。このように「無役家並之供廻」に固執する者たちは他にも見られたと思うが、日々の供廻りについては様子が異なっていたようである。同記録宝暦11年(1761)正月18日条には次のようにある。

木村与三郎下宿相招夕飯出候^{計二業}、内証えも相通何も対顔、依所望音楽有之^{筈節太鼓}、夜食出五半比被帰也、予間、在所申達山荘ニ居候処、仙台宅ニも又居、府中も上下四人ニ而ゆき通候、此段 忠山様御存知被遊候而度々 御意も有之候、然処近年何と歟右之通ニも仕悪様ニも存候、各方御定も可有之哉問候処、在所申達候衆ハ在郷ニ居候而、仙台え出候にハ相定身分相応之人数召連不申候得ハ私共方ニ而答申候、前々より忍而府中通行有之方幾人も有之、佐々久馬親ハ、乗輿ニ而鑼なし、若党一・二人、挟箱もなく、後藤執政え御間晒^{解力}ニ而度々被相越候、執政其段御心得候得共御構もなく一生夫ニ而済申候、当時も忍而通行有之候而も指而忍ひ候ヲ押而御尋候事ハ無之候、然共何事そ出来達ニも成候時、身分不相応之人数ニ而は答申候、途中ニ而執政方え行逢可立忍様無之時は時宜可有之候、執政之意ニより其分之会釈ニ而御過ニも可有之候得共、吟味と申ニ成候而ハ其科難遁候、前々と違ひケ様之義御さくりも聞得候間用心可有之候、予云、御一家・御一族衆始在所分ニ而忍ひ而府中通行幾等も今以有之候、此等も御説之通ニ候得は至而痛候事ニ而、前々有之義、縦事出来 公義届ニ成候而も御答メ無之と申物ニ無之候而は痛

20) 『伊達世臣家譜一』(『複製版仙台叢書』宝文堂、1975年)149頁、『高野家記録』宝暦14年12月13日条より。

と成候、又尤新規事ニも無之候間ケ様之儀ハ被相伺御定置候ハ、痛ニも不成、また先例と存忍ヒニ通行御咎ニあひ候者も可有之由申候得ハ、其段ハ吟味申候得共、指当所定仙者・在所者と申時ハ、在所いつも在所ニ居、出府之時ハ出府之人数ニ而通行可申、指当所ニ而吟味可申達様無之候、扱又只今迄忍ヒ通行之義能用心有之候ハ、今迄之通ニ而も可相済候との事也、予云、夫ニ而も忍而通行申ハ危道ニ而、先ハ難成事ニ候、折ふし茂ヶ崎参詣仕候処、毎度出府達も世話故自分出府其時々達ニ及申間敷歟と庄子武助等ニ問候処、自分出府とても出府申候ハ、可相達然との返事にて候由申候得ハ、彼等もあふなかり御挨拶申に而可有之由被話也

これは高野家の親類である木村与三郎が高野倫兼宅を訪れ、夕食を食べながら語り合った内容である。倫兼は藩に在所下向を願い出た後でも龍宝寺の境内にある別宅（「山荘」）や仙台屋敷にそのまま居続け、城下を「上下四人」にて歩き回っており、以前は藩主宗村も承知していたことなのだという。ところが、最近ではそのようなことがし難い雰囲気になってきており、何か決まり事でもあるのかどうか当時目付役を務めていた与三郎に尋ねている²¹⁾。与三郎によれば、在所下向を申し出た者は在郷に居るのが当然で、仙台へ出てくるには「相定身分相応之人数」を召し連れる必要があり、そうでなければ目付が処罰せねばならないが、「前々より忍而府中通行有之方幾人も有之」というのが実情で、「佐々久馬親」などは、「乗輿ニ而鑪なし、若党一・二人、挟箱もなく、後藤執政え御間晒^{解カ}ニ而」度々後藤執政の許を訪れているが「執政其段御心得候得共御構もな」く済んでいた。ただし、何か事が起これば身分不相応の人数であるという理由で処罰されることもあり、奉行衆と行き逢った際に「吟味」ということになり罪を逃れられないような状況になる可能性もある。まして「前々と違ひケ様之義御さくりも聞得」るので用心した方がよいのだという。これに対し倫兼は、「御一家・御一族衆始在所分ニ而忍ヒ而府中通行幾等も今以有之」のであり、彼らについても「御説之通ニ候得は至而痛候事」なのであって、「前々有之義、縦事出来 公義届ニ成候而も御咎メ無之と申物ニ無之候而は痛と成候」と述べている。

すなわち、彼らの話しからわかるように、日常的には家格門閥層の者であっても供人数に全くこだわらず、藩の規定も無視して「身分不相応之人数」で行き来する者が少なからず見られたのである。自己の家格が重んじられる「年始其外指立之節」に「家席之方」に依拠した人数を召し連れることにこだわった長沼五郎助の事例とは全く対照的な姿と言えよう。

おわりに

宝暦2年（1752）6月5日、古内肥後組の坂本養十郎は、清之丞という人物を怒りにまかせ傷つけ、清之丞が黙っていたことをよいことに報告もせず、かつ、「分限ニ応し郎従召抱候筈之御定」であるにも拘わらず「五百石以上之禄を拝領し居ながら無僕同然之体」につき不届き至極ということで、「御城下并宮城郡・名取郡・黒川郡三郡御追放」の刑に処されている²²⁾。仙台藩が、

21) 「山荘」については『高野家記録』寛延3年9月1日条など、木村与三郎については『伊達世臣家譜一』96頁より。

22) 高倉淳『仙台藩刑罰記』1080（1988年、542頁）。

活きた規定として供連規定を運用し、「御定」を遵守するよう藩士たちに求めていたことがわかる。しかるに、この事件から約4年後の宝暦6年正月の儉約令を出すにあたり大幅な供人数の削減を認め、大番組士らへ「或ハ一僕、或ハ無僕ニ而も勝手次第」と命じたのも藩当局自身なのであった（表9参照）。その後も藩は財政再建のために儉約令を出し続けており、しばしば「面々身持等之義」を「用捨」し規定を緩め、時に儉約令以前の状態に戻し、時に微調整を行うなど、紆余曲折していくことになる。

藩士たちの側も、供連にこだわる者、こだわらない者、そして、こだわれない者たちがおり、文政8年（1825）頃の様子について、藩は次のように説明している²³⁾。すなわち、「大番組無役」の者たちは、「禄柄之者」であっても「先ハ無僕に而」出歩いており、それは「畢竟相続難洪ニ而不行届故之事」だとは思われるが、中には「相応ニ召仕候者有之輩ニても一人之供を召連候は却而目立候様ニ心得相扣候者忸」もいるという。藩は、この問題は「禄之高下ニも不拘義に而、供をも召連候者士風之覚悟猶有之筋」であり、「忸・三百石以上」の者ともなれば「無僕ニ而」出歩くのは「可恥入程之義」なのであるから、「強而禄柄ニ無之候とも召仕も有之者ハ人繰次第先ハ僕を召連候様」に心懸けよと命じている。当時にあつては「無僕ニ而も勝手次第」とはされなかったのである。

藩が言うように供を召し連れるかどうかは「士風之覚悟」に関わる事柄だとしても、こうした問題を単に「士風之覚悟」云々だけで片付けることはできない。確かに士風の廃頹も見られるが、果たしてそれだけが原因であったのか。文政期よりも前の寛政9年（1797）には、生活に行き詰まった藩士たち2033人が一味同心し「士一揆」が企てられている²⁴⁾。寛政10年5月段階での仙台藩伊達家家臣総数は10069人であり²⁵⁾、その5分の1以上の者が賛同したことになる。

自分たちの生活の惨状を語り家格一門伊達安芸・伊達式部兩人に藩への取りなしを訴えた願書では、多重債務に苦しみ、「面々出生之子ハ家督計忝兩人助ケ置、其余ハ皆戻し子ニ仕、又は壱人も助ケ置可申様無之者」もいるような「目もあてられぬ事」が起きている実態が述べられ、「武具・馬具・兵具・衣類より器物之類、衣服書冊之類、尤竹木等迄も売払」って父母妻子を養っている様子について必死に訴えている。「家内父母妻子之衣食ともニ取続せ可申様無之」彼らにとっては、子どもたちへ「武術諸芸稽古読書等迄も可為仕様は元より無之」なのであって、定められた供人数を用意することもかなり難しいことであったと思われる。願書には「家内ヲ養」・「父母妻子ヲ養」といったような表現が頻出しており、「士風之覚悟」を示す以前に、「永ク家内安堵仕居」ことが切なる願いなのであって、身動きがとれない閉塞状況がそこにはあったのである。

【付記】本稿は、平成20～23年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）による研究成果の一部である。

23) 『統法禁』4-1。

24) 難波信雄「仙台藩の寛政改革」（『東北学院大学東北文化研究所紀要』5, 1973年）23～26頁、『落文写』（『仙台市史資料編2』〈1996年〉116〈210～225頁〉）。

25) 『惣家中分限並役附帳』（東北大学附属図書館所蔵〈本館己A・3・196〉）より。